

「藤山道」と関連遺跡の分布



途切れています。これについても、地震動の結果、円弧摩擦滑りが発生して斜面が崩壊したという指摘があります。

松村一良氏は水縄断層の発掘調査を踏まえて、これらの地震痕跡が『日本書紀』天武七年条に見える「筑紫大地震」によって引き起こされたものと考えました。すなわち、高良山神籠石・前身官衙・上津土塁跡の3遺跡は、天武七年（678）※の時点で同時に存在していたと考えられるのです。

以上から、前身官衙は何らかの行政的・軍事的拠点、高良山神籠石はその背後にそびえる山城、上津土塁跡は有明海方面からの侵入を遮断する防衛施設というセット関係が浮かび上がります。これらは、一連の計画と目的の下に築造され、互いが有機的に連携して機能していたものと思われるのです。

※ 天武七年は一般に西暦678年であるが、地震が発生した12月は、1日がユリウス暦の679年1月17日にあたることから、ユリウス暦の679年と記載されることもある。

山川前田遺跡で発見された水縄断層系追分断層。活動した場合の地震規模はM7.1、活動周期は3,600年と計算されている。



地下に残存していた上津土塁跡の版築土層。極めて硬く突き固められているが、地震動によるズレが見られる。



1. 両筑平野の神籠石に対する視点

1900年代初頭の「神籠石論争」で対立していた神域説と山城説は、1963年におつぼ山神籠石の調査で門と列石上の土塁が確認されたことが契機となって城郭としての位置づけが定着した。しかし、近年の発掘調査の進展にもかかわらず、どのような契機で、いつ、何故その場所に築かれたのか、研究者によって諸説がある。

北部九州に位置する筑紫平野は九州最大の面積を誇り、有明海北岸地域の佐賀平野（白石地域、佐賀地域）、同東岸地域の筑後平野（筑後地域）と、久留米市を含む筑後川中流域内陸部の両筑平野（久留米・小郡・浮羽地域）に分けることができる。このうち両筑平野は、南縁を耳納山地に、北縁を朝倉低山地に、西を背振山地東部の九千部山地によって限られている。このように両筑平野は地形的に完結した閉塞的な三角地帯ではあるが南西部は有明海方面に開け、また古来からの対外交流窓口である福岡平野とは二日市狭隘部低地を介して対峙するという地理・地形的な特徴を持っている。そして両筑平野における神籠石式山城は地形のなすトライアングルの頂点に配置され、北側の頂点奥部には博多湾側からの侵攻に備えた防衛ライン水城・大野城が存在するとともに、それらの施設によって守られた古代最大の地方官衙「大宰府」が置かれている。

朝鮮半島において唐・新羅に滅ぼされた百濟遺臣の援軍要請に応じて派兵した白村江の敗戦〔天智2（663）年〕により対外的脅威からの侵略の危機に直面にした我が国は、「筑紫大宰」を那津之口から内陸の太宰府に移駐させ、国防最前線拠点と位置づける。そして、水城〔天智3（664）年〕、大野城・基肆城〔天智4（665）年〕に続いて周辺の防禦網を整備し官司「大宰府」を圍繞した。大野城と基肆城の築城には百濟の亡命官人が深く関与していたことが『日本書紀』の記載によって知れ、以後、大和高安城・讃岐屋嶋城・対馬金田城〔天智6（667）年〕まで、半島の技術を取り込んで築かれた文献に現れる山城が朝鮮式山城と呼ばれる。都や周辺官衙が移転を繰り返すなか、大宰府は成立から廃絶までの長期にわたって不動であり、歴史的立場を継続したが、古代律令制下において朝鮮式山城と一体化した国防拠点「大宰府」の設置場所に現在地を選定した国家の戦略的意図と背景について特に両筑平野の地理・地形的条件と初期大和政権期を含む前史に視点を据えることにより、時代区分を跨いだ歴史の継続性の観点から神籠石式山城が築造された契機についてもアプローチできると考える。

2. 前史～律令期以前の遺跡と動向～

両筑平野のなかでも北部の三国丘陵とその近隣には古式前方後円墳が極めて狭い範囲に集中し、九州でも存在感が際だっている。津古生掛古墳は初期大和政権中枢との密接な政治的関係が象徴される「纏向型前方後円墳」で、津古1号墳・同2号墳と続いて纏向型の墳形を採用すること自体が一地方首長としては極めて稀な事例と言える。祇園山古墳から出土したとされる高良大社所蔵鏡との同型鏡を含む3面の三角縁神獣鏡を副葬する二日市地峡部の原口古墳もまた纏向型前方後円墳で、両筑平野が形成するトライアングルの南北頂点に加え平野東部（神蔵古墳）にも初期大和政権と関わりを持った有力在地首長墳が分布する。この型式に続いて出現した「定型化した前方後円墳」は全国的に広汎に拡散し、三角縁神獣鏡の分有関係に表象される畿内政権と地方豪族の擬制的同族関係の成立という形で前進をみる。

古墳時代中期になると各在地首長間の均衡を崩す形で東部（浮羽）地域に非在地的な首長墓系列が形成され、前期段階の在地首長の勢力分布の在り方とは質的な偏りが生じる。古墳時代の地方経営は大和政権を頂点としつつも、在地における経済力・軍事力を基盤とした各々の地方豪族に任されていた。そのような擬似的統括のなか、八女地域で台頭してきた磐井勢力の脅威に対する監視や牽制の役割を担って浮羽地域に大和政権から武官が派遣されて同地に拠点を据え、月岡古墳を鏡矢とする浮羽地域の若宮古墳群が、筑後南部で石人山古墳を筆頭に形成される筑紫国造の奥津城（八女古墳群）と対峙する構図をとる。こうした動きには、中央による辺境の地九州経営に係る在地勢力抑止の内政的側面と、有明海を介した対外交渉権の掌握という表裏一体化した背景があった。港としての有明海的重要性は、水沼君が海上交通を掌る宗像大神を祀り海北道と呼ばれた韓半島航路への関与を示すことにも垣間見える。筑紫君が通じていた新羅との外交権を含む半島経営拠点の一元的掌握を目論む中央